『生涯学習・キャリア教育研究』第8号（2012年） 31-37頁

文系学生のキャリア・イベントとその形成要因との関連
― 名古屋大学の学生に対するアンケート調査結果に即して ―

水谷 友香・寺田 盛紀

1. はじめに

近年、若者世代(さしあたって15歳から25歳未満の層)の職業意識や職業行動の変化に注目されることが多い。

たとえば、厚生労働省の平成23年版労働経済白書は、働くことに関する最近の若者の意識としては、「経済的に豊かな生活を送る」という物質的、経済的な側面よりも、自分自身が「楽しく」生活したいという点を重視していることを指摘していること、また、「自分の能力をためす」といった、仕事を通じ何かに挑戦し、チャレンジする意欲については過去に比べ低下してきていることを指摘している(厚生労働省2011, p. 169)。

さらに、意識の面だけではなく、若者の実際の職業行動もこれまでとは異なるものが顕著になってきている。同じくその白書では、大学卒業後の進路をみると、過去どの年度でも就職者が最も多くなっているが、1990年代以降は進学者やその他の割合も上昇しており、卒業者に占める就職者の割合は以前に比べ低下していることが指摘されている(同p.130)。つまり、就職活動をしたものの就職先が決まらなかったため留年を選択する、いわゆる就職留年者や学卒無業者の増加が懸念されている。

このような状況において、若年層の職業に関する意識や行動の変化に関して、様々な地点、事例に基づいた、より精細な実態を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的と方法

2-1. 研究の目的

本研究は、名古屋大学文系学部4年生の就職活動の過程に即して、彼・彼女らがどのようなきっかけ・経験など(キャリア・イベント)をよりどころとして職業選択を行っているのか、そのことは何によって左右されるのかということを明らかにし、近年の若者の職業意識と行動の変化を把握することを目的とする。

2-2. 調査の参加者

就職活動、公務員試験を終了し、就職先が決定した名古屋大学文系学部（文学部、教育学部、経済学部、法学部）の4年生を対象とした。筆者の知人を介しランダムに依頼した118人から有効回答を得た。

2-3. 調査の時期

2011年10月から11月の2か月間に質問紙を配布し、回収した。

2-4. アンケート項目・尺度の構成

問1　回答者の属性。年齢、性別、学年、学部、学科。部活動やサークルに所属している（していた）場合は、その団体名を尋ねた。

問2　職業観
「あなたは働くことを通して、以下に挙げた項目について、どの程度それを実現したいと思いますか」という質問文であり、28項目にわたり5件法で尋ねた。質問項目は、松本（2008）の調査において使用されたものを用いた。

問3　大学在学中の諸経験
「家事手伝い」や「部活動・サークル活動」などの11項目の活動や出来事について、経験したことがあるか否かを、就職活動開始前と開始後に分けて尋ねた。質問項目は寺田（2009）の調査において使用された項目を参考に作成した。

問4　職業選択に関するキャリアイベント
職業選択に当たり、影響したと感じる事柄について、どの程度影響したと感じるか、17項目にわたり5件法で尋ねた。質問項目は、松本(1995)の調査において使用されたものを参考に作成した。

本稿では、大学の専門教育やキャリア支援の役割に注目する立場から、問4に関わる職業選択に影響しうるイベント等に対して、さらに、在学中の諸経験や諸属性がどのように影響するのかを検討する。問2に関しては紙数の関係で分析から割愛する。

2-5. 調査データの処理・解析

分析には統計解析ソフト SPSS14.0J for Windows を使用した。

3. 調査の結果

3-1. 回答者の属性

回答者の属性を男女別に見てみると、男性は 39 名 (33.1%)、女性は 79 名 (66.9%) であった。

さらに学部別に見てみると、文学部が 33 名 (28%)、教育学部が 30 名 (25.4%)、経済学部が 45 名 (38.1%)、法学部が 10 名 (8.5%) であった。

3-2. キャリアイベント・モデルに関する回答結果

職業を選択する上で重要であると考える要因（以下、キャリアイベント）の得点の回答者全体の平均値 [SD] は「職業に対する予備知識」が 3.59[1.10]、「家族の助言」が 3.38[1.26]、「自分の心身の健康」が 3.03[1.22]、「職業の労働条件」4.07[0.92] が、「就職以前の就労経験」が 2.53[1.34]、「職業適性」が 3.32[1.09]、「採用可能性の高低」3.35[1.22] が、「家庭の経済状況」が 2.36[1.17]、「自分の価値観」が 4.52[0.57]、「先輩・友人の助言」が 3.59[1.06]、「運」が 3.86[1.05]、「縁故」が 2.43[1.48]、「大学教員」が 1.84[1.15]、「就職支援などの大学の進路指導」が 2.47[1.28]、「職業の社会的評価」が 3.60[0.99]、「大学での講義」が 2.16[1.13]、「自分の学業成績」が 2.01[1.02] であった。

この結果から、回答者は全体的に職業を選択する上で「職業の労働条件」と「自分の価値観」の影響を受けたと考えている傾向にあることが明らかとなった。同時に、「大学教員」「大学での講義」「自分の学業成績」の影響はあまり受けていないことが明らかとなった。

4. 関連項目とのクロス分析

4-1. キャリアイベント・モデルの男女差の検討

そこで、職業選択要因たるキャリア・イベントがさらに何によって影響されているかを重層的に検討するために、いくつかの他の項目との関連を見てみる。

まず、男女差の検討を行うために、キャリア・イベントの得点を従属変数、性別を独立変数として t 検定を行った。平均的に高い得点を示した「職業の労働条件」や「自分の価値観」では男女間の有意な差は見られず、「家族の助言」（$t(116)=2.19, p<.05$）については、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。男性よりも女性の方が職業を選択する上で「家族の助言」の影響を受けたと考えていることが明らかとなった。

キャリア・イベントの得点の男女別平均値と SD および t 検定の結果を表 1 に、平均値のグラフ（左が男性右が女性）を図 2 に示す。

表 1　男女別の平均値と SD および t 検定の結果

	男性		女性		
	平均	SD	平均	SD	*t* 値
職業に対する予備知識	3.59	1.09	3.59	1.10	0.02
家族の助言	3.03	1.35	3.56	1.18	2.19*
自分の心身の健康	2.72	1.23	3.18	1.20	1.94
職業の労働条件	3.87	0.98	4.16	0.88	1.63
就職以前の就労経験	2.26	1.31	2.67	1.34	1.59
職業適性	3.10	1.14	3.43	1.05	1.55
採用可能性の高低	3.49	1.37	3.28	1.14	0.87
家庭の経済状態	2.23	1.04	2.42	1.24	0.81
自分の価値観	4.46	0.64	4.54	0.53	0.70
先輩・友人の助言	3.46	1.17	3.66	1.01	0.94
運	3.62	1.23	3.99	0.94	1.67
縁故	2.13	1.42	2.58	1.49	1.58
大学教員	1.72	1.19	1.90	1.13	0.80
就職支援などの大学の進路指導	2.15	1.33	2.62	1.23	1.88
職業の社会的評価	3.69	0.83	3.56	1.06	0.76
大学での講義	2.15	1.16	2.16	1.13	0.05
自分の学業成績	1.77	0.90	2.13	1.05	1.81

*$p<.05$

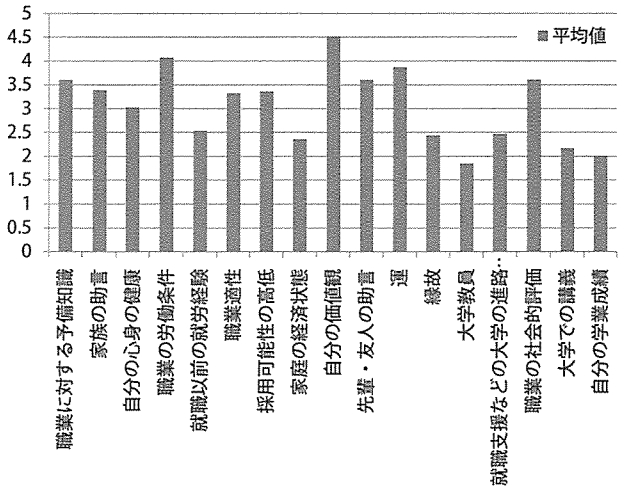

図 1　キャリア・イベントの回答者全体の平均値

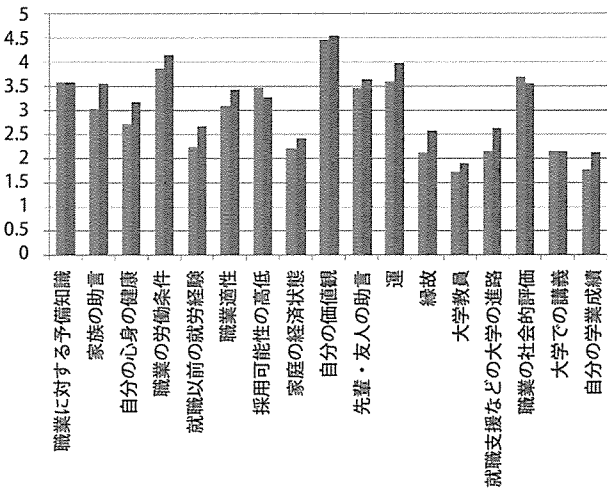

図 2　男女別の平均値

4-2. キャリア・イベントの学部差の検討

つぎに、所属学部や専門教育の経験の相違がキャリア・イベントの形成状況に影響しているかどうかをみるために、後者の得点を従属変数、学部を独立変数として1要因の分散分析を行った。平均的に高い得点を示した「自分の価値観」はここでも学部間の有意な差は見られなかったが、「職業の労働条件」、「先輩・友人の助言」、「縁故」、「就職支援などの大学の進路指導」において有意な得点差が見られた。

「職業の労働条件」において、グループ間の得点差は5％水準で有意であった（$F(3,114)=2.71, p<.05$）。Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、法学部と教育学部との間に有意な得点差が見られた。法学部より教育学部の方が職業を選択する上で「職業の労働条件」の影響を受けたと考えていることが分かった。

「先輩・友人の助言」において、グループ間の得点差は5%水準で有意であった（$F(3,114)=3.56, p<.05$）。Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、経済学部と教育学部との間に有意な得点差が見られた。経済学部より教育学部の方が職業を選択する上で「先輩・友人の助言」の影響を受けたと考えていることが分かった。

「縁故」において、グループ間の得点差は1%水準で有意であった（$F(3,114)=5.76, p<.01$）。Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、文学部と教育学部との間、また法学部と教育学部、経済学部の間に有意な得点差が見られた。文学部より教育学部の方が職業を選択する上で「縁故」の影響を受けたと考えていることが分かった。また、法学部よりも教育学部と経済学部の方が職業を選択する上で「縁故」の影響を受けたと考えていることが分かった。教育学部と経済学部では、教育学部の得点の平均値の方が、経済学部のそれよりも高い値を示していた。

「就職支援などの大学の進路指導」において、グループ間の得点差は5％水準で有意であった（$F(3,114)=3.08, p<.01$）。Tukey の HSD 法（5％水準）による多重比較を行ったところ、文学部と経済学部の間に有意な得点差が見られた。経済学部より文学部の方が職業を選択する上で「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えていることが分かった。

分散分析の結果を表2に、学部別の平均値を表3に示す。

表2　学部別の分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
職業に対する予備知識	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	6.24	3.00	2.08	1.77	0.16
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	134.24	114.00	1.18		
	合計	140.47	117.00			
家族の助言	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	4.86	3.00	1.62	1.02	0.39
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	180.98	114.00	1.59		
	合計	185.84	117.00			
自分の心身の健康	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	5.95	3.00	1.98	1.34	0.27
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	168.97	114.00	1.48		
	合計	174.92	117.00			
職業の労働条件	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	6.62	3.00	2.21	2.71	0.04*
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	92.84	114.00	0.81		
	合計	99.46	117.00			
就職以前の就労経験	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	11.18	3.00	3.73	2.14	0.10
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	198.18	114.00	1.74		
	合計	209.36	117.00			
職業適性	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	8.29	3.00	2.76	2.43	0.07
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	129.48	114.00	1.14		
	合計	137.76	117.00			
採用可能性の高低	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	2.01	3.00	0.67	0.44	0.72
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	172.74	114.00	1.52		
	合計	174.75	117.00			
家庭の経済状態	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	0.44	3.00	0.15	0.10	0.96
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	160.61	114.00	1.41		
	合計	161.05	117.00			
自分の価値観	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	0.66	3.00	0.22	0.68	0.56
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	36.81	114.00	0.32		
	合計	37.47	117.00			
先輩・友人の助言	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	11.36	3.00	3.79	3.56	0.02*
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	121.11	114.00	1.06		
	合計	132.47	117.00			
運	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	1.94	3.00	0.65	0.58	0.63
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	127.89	114.00	1.12		
	合計	129.83	117.00			
縁故	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	33.54	3.00	11.18	5.76	0.00*
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	221.41	114.00	1.94		
	合計	254.96	117.00			
大学教員	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	1.31	3.00	0.44	0.33	0.81
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	152.63	114.00	1.34		
	合計	153.94	117.00			
就職支援などの大学の進路指導	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	14.33	3.00	4.78	3.07	0.03*
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	177.04	114.00	1.55		
	合計	191.36	117.00			
職業の社会的評価	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	6.94	3.00	2.31	2.46	0.07
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	107.34	114.00	0.94		
	合計	114.28	117.00			
大学での講義	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	2.53	3.00	0.84	0.65	0.58
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	147.41	114.00	1.29		
	合計	149.94	117.00			
自分の学業成績	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	0.70	3.00	0.23	0.22	0.88
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内	120.29	114.00	1.06		
	合計	120.99	117.00			

*$p<.05$

表3　学部別の平均値

	文学部	教育学部	経済学部	法学部
	平均値	平均値	平均値	平均値
職業に対する予備知識	3.42	3.97	3.44	3.70
家族の助言	3.33	3.63	3.18	3.70
自分の心身の健康	2.97	3.40	2.87	2.80
職業の労働条件	4.03	4.33	4.07	3.40
就職以前の就労経験	2.55	3.00	2.33	2.00
職業適性	3.18	3.77	3.20	3.00
採用可能性の高低	3.48	3.20	3.40	3.10
家庭の経済状態	2.33	2.43	2.36	2.20
自分の価値観	4.58	4.57	4.42	4.60
先輩・友人の助言	3.70	3.87	3.22	4.10
運	3.85	3.83	3.98	3.50
縁故	2.03	3.07	2.58	1.20
大学教員	1.79	1.70	1.96	1.90
就職支援などの大学の進路指導	2.91	2.37	2.11	2.90
職業の社会的評価	3.24	3.63	3.76	4.00
大学での講義	1.97	2.23	2.18	2.50
自分の学業成績	1.91	2.07	2.07	1.90

4-3. キャリア・イベントの形成の職業的経験による差の検討

(a) 就職活動開始前の職業的経験による差

さらに、キャリア・イベントの形成状況にとって、就職活動開始前の経験による差があるのかを検討するために、キャリア・イベントの得点を従属変数、経験の有無を独立変数としてt検定を行った。以下のような結果が抽出された。

「先輩・友人の助言」($t(116)=2.58, p<.05$) について、「大学の就職指導・進路指導」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも有意に高い得点を示した。つまり、「大学の就職指導・進路指導」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも「先輩・友人の助言」の影響を受けたと考えているといえる。

「職業適性」($t(35.819)=-2.03, p<.05$) について、「部活動・サークル活動」を就職活動開始前に経験したことのない人の方が、ある人よりも有意に高い得点を示した。つまり、「部活動・サークル活動」を就職活動開始前に経験したことのない人の方が、ある人よりも「職業適性」の影響を受けたと考えているといえる。

「職業に対する予備知識」($t(115.000)=4.04, p<.001$)、「採用可能性の高低」($t(115.000)=-5.81, p<.001$)、「就職支援などの大学の進路指導」($t(115.000)=-13.19, p<.001$)、「職業の社会的評価」($t(115.000)=-4.38, p<.001$) について、「アルバイト」を就職活動開始前に経験したことのない人の方が、ある人よりも有意に高い得点を示した。つまり、「アルバイト」を就職活動開始前に経験したことのない人の方が、ある人よりも「職業に対する予備知識」「採用可能性の高低」「就職支援などの大学の進路指導」「職業の社会的評価」の影響を受けたと考えているといえる。

「先輩・友人の助言」($t(66.608)=3.30, p<.05$)、「大学での講義」($t(100.049)=2.15, p<.05$) について、「先輩への相談」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも有意に高い得点を示した。つまり「先輩への相談」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも「先輩・友人の助言」「大学での講義」の影響を受けたと考えているといえる。

「家族の助言」($t(116)=5.54, p<.001$)「自分の心身の健康」($t(116)=2.11, p<.05$)「先輩・友人の助言」($t(116)=3.28, p<.01$)「就職支援などの大学の進路指導」($t(116)=2.04, p<.05$) について、「家族への相談」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも有意に高い得点を示した。つまり「家族への相談」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも「家族の助言」「自分の心身の健康」「先輩・友人の助言」「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えているといえる。

「家族の助言」($t(116)=2.34, p<.05$)「自分の心身の健康」($t(116)=2.31, p<.05$)「縁故」($t(34.589)=2.09, p<.05$) について、「友人への相談」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも有意に高い得点を示した。つまり「友人への相談」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも「家族の助言」「自分の心身の健康」「縁故」の影響を受けたと考えているといえる。

「縁故」($t(116)=2.43, p<.05$)「学業成績」($t(77.146)=2.27, p<.05$) について、「自己分析」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも有意に高い得点を示した。つまり「自己分析」を就職活動開始前に経験したことのある人の方が、ない人よりも「縁故」「学業成績」の影響を受けたと考えているといえる。

「職業の労働条件」($t(71.947)=-2.15, p<.05$)「先輩・友人の助言」($t(116)=-2.01, p<.05$)「就職支援などの大学の進路指導」($t(101.705)=-2.95, p<.01$) について、「企業研究」を就職活動開始前に経験したことのない人の方が、ある人よりも有意に高い得点を示した。つまり、「企業研究」を就職活動開始前に経験したことのない人の方が、ある人よりも「職業の労働条件」「先輩・友人の助言」「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えているといえる。

(b) 就職活動開始後の職業的経験による差

また、キャリア・イベントの形成状況に就職活動開

始後の経験による差があるのかを検討するために、キャリア・イベント項目の得点を従属変数、経験の有無を独立変数としてt検定を行った。以下のような結果が見られた。

「家族の助言」($t(116)=2.23, p<.05$)について、「ボランティア」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり、「ボランティア」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「家族の助言」の影響を受けたと考えているといえる。

「自分の価値観」($t(116)=2.23, p<.05$)「運」($t(116)=2.38, p<.05$)「就職支援などの大学の進路指導」($t(115.676)=3.52, p<.01$)について、「大学の就職指導・進路指導」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり、「大学の就職指導・進路指導」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「自分の価値観」「運」「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えているといえる。

「自分の心身の健康」($t(116)=-2.26, p<.05$)「職業適性」($t(103.493)=-2.66, p<.01$)について、「部活動・サークル活動」を就職活動開始後に経験したことのない人の方が、ある人より有意に高い得点を示した。つまり、「部活動・サークル活動」を就職活動開始後に経験したことのない人の方が、ある人より「心身の健康」「職業適性」の影響を受けたと考えているといえる。

「自分の価値観」($t(109.409)=4.19, p<.001$)「運」($t(102.517)=2.51, p<.05$)について、「インターンシップ」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり「インターンシップ」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「自分の価値観」「運」の影響を受けたと考えているといえる。

「縁故」($t(46.266)=7.94, p<.001$)について、「アルバイト」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり「アルバイト」を就職活動開始後に経験したことのある人の方がない人より「縁故」の影響を受けたと考えているといえる。

「先輩・友人の助言」($t(116)=3.82, p<.001$)「就職支援などの大学の進路指導」($t(63.045)=2.25, p<.05$)について、「先輩への相談」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり「先輩への相談」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「先輩・友人の助言」「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えているといえる。

「家族の助言」($t(116)=7.68, p<.001$)「職業の労働条件」($t(116)=2.10, p<.05$)「先輩・友人の助言」($t(116)=2.82, p<.01$)「就職支援などの大学の進路指導」($t(116)=3.45, p<.01$)について、「家族への相談」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり、「家族への相談」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「家族の助言」「職業の労働条件」「先輩・友人の助言」「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えているといえる。

「職業の労働条件」($t(116)=2.21, p<.05$)「職業適性」($t(116)=2.00, p<.05$)について、「自己分析」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり、「自己分析」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「職業の労働条件」「職業適性」の影響を受けたと考えているといえる。

「職業の労働条件」($t(116)=2.38, p<.05$)「就職支援などの大学の進路指導」($t(50.731)=2.84, p<.01$)について、「企業研究」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より有意に高い得点を示した。つまり、「企業研究」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人より「職業の労働条件」「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えているといえる。

5. 考察

5-1. キャリア・イベントの形成状況の全体傾向

回答者は全体的に職業を選択する上で「職業の労働条件」と「自分の価値観」の影響を受けたと考えている傾向にあることが明らかとなった。本論文の冒頭（はじめに）で論究したように、現在の若者（大学生）はたしかに「自分の価値観」の影響を受ける傾向が強いことが明らかになった。しかし、同時に、本調査では「職業の労働条件」の影響も強く受けたという結果も出ている。つまり、本調査の対象者は「自分の価値観」のみに基づいて職業を選択するのではなく、労働条件といった現実的な部分も考慮して職業(就職先)を選択する傾向にあるということである。これは学生が昨今の景気の低迷や世界的な経済危機を意識していることによるのではないだろうか。

他方、「大学教員」「大学での講義」「自分の学業成績」の影響はあまり受けていないことも明らかとなった。

これは、大学教育や大学のキャリア支援にとって促す結果を示しているが、本調査が学部や専攻と職業選択が結びつきにくい文系学部生を対象としていることも影響していると推測される。

5-2. キャリア・イベントと性別

キャリア・イベントの得点に男女差があるかを見たところ、「家族の助言」について、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示した。若干の先行研究でも家族は影響要因として上げられていたが、本調査では男性よりも女性の方が職業を選択する上で「家族の助言」の影響を受けたと考えていることが明らかとなった。

この原因として２つの可能性を指摘したい。第１に、女性特有の様々なライフイベントと仕事の折り合いをどのようにつけていくのかなど、女性の方が男性よりも就職活動の際に不安や疑問に感じる事柄が多く、身近な存在である家族に助言を求めていることによるものである。第２の可能性は、女性の方が男性よりも職業を決定する際に家族の事情や願望に縛られる傾向がある、というものである。自分の職業を選択する上で、一番身近な存在である家族の助言の影響を受けることは至極自然なことであると考えられるが、家族の助言が常に取り入れられるべきものであるかはよく考慮するべきであろう。

5-3. キャリア・イベントと学部

キャリア・イベントの形成状況に所属学部が関係しているかどうかに関して、法学部より教育学部の方が職業を選択する上で「職業の労働条件」の影響を受けたと考えていること、また経済学部より教育学部の方が職業を選択する上で「先輩・友人の助言」の影響を受けたと考えていることが分かった。これは教育学部の方が女性の割合がかなり高いことが原因ではないかとも考えられる。女性が働きやすい環境であるか、働き続けられるかどうかなど、労働条件をより重視して職業（就職先）を選択していることによるのではないかと思われる。また、女性としてどのように働いていくかを考える上で、先輩や友人の助言を受けたことの結果が出たものと思われる。女性が働く際には、自分一人で考えているだけでは分からないことがそれほど多くあるということが言える。

また、経済学部より文学部の方が職業（就職先）を選択する上で「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたと考えていることも分かった。文学部での専攻内容は経済学部のそれと比べるとより職業選択に結びつきにくく、それゆえに文学部の学生が大学の就職支援を積極的に活用したことによると考えられる。

5-4. キャリア・イベントと就職活動経験

当然問うべきであろうが、キャリア形成やキャリア支援に関する諸経験があるかないかで、キャリア・イベントの得点（形成）にいくつかの項目で差があった。すでに、若干の先行研究においても指摘されているが、すべての人が等しくそれらの影響を受けて職業選択を行うというわけではなく、それまでの人生でどのような経験をしたかによって、影響要因も違ってくるということが分かった。

しかし、本調査では就職活動を経験した学生を対象としたが、就職活動前後においてどのような経験をしたかで、職業選択の影響要因もかなり異なっていた。たとえば、「大学の就職指導・進路指導」を就職活動開始後に経験したことのある人の方が、ない人よりも「就職支援などの大学の進路指導」の影響を受けたという結果が出たことをあげたい。回答者全体の傾向を見てみると、「大学の進路指導」の影響はあまり受けていない傾向にあるが、この結果と照らし合わせると、単に学生が「大学の進路指導」を経験していないことによると考えられる。実際、就職活動開始前と開始後の経験についての分析において、「大学の就職指導・進路指導」は就職活動開始前と比べると就職活動開始後において経験者数は増加していたが、それでも経験ありと答えた人数は68人であった。まだまだ大学の就職支援を利用する学生は少なく、それゆえに全体としては「大学の進路指導」の影響をあまり受けていないという結果が出たのだろう。

大学生に限らず、人が職業選択をする際に影響を与える要因は、その人がどのような経験をしたことがあり、どのような経験をしたことがないのかを考慮に入れなければならないのではないだろうか。同時に職業選択を控えている学生には、周りの人に相談したり、大学の就職支援を利用したりといった様々な経験が必要である。

6．おわりに

本研究では、就職先を決定した名古屋大学文系学部４年生を対象にアンケート調査を行い、キャリア・イベントの形成状況を性別、学部、就職活動開始前後の経験との関連で検討した。

本研究で得られた新たな発見は、キャリア・イベントの形成は性別や学部、諸経験において、かなりの差

があることが明らかになった。学生は一見皆が同じような就職活動を行っているように見えるものの、性別や学部、経験によって、異なる要因の影響を受けて職業(就職先の)選択をしていることが明らかとなった。名古屋大学文系学部4年生というかなり限られた範囲での本調査においても、職業選択のプロセスの複雑さを垣間見ることができた。先行研究では、どのような要因が職業選択に影響を及ぼしているかは示していたが、性別や経験の有無によってどう異なってくるのかはあまり言及されていなかった。本研究を踏まえると、職業選択に影響を与えるキャリア・イベントについて調査する場合は、少なくともそれらの観点から特徴を捉えることの有効性も明らかになった。

他方で、サンプル数が少なかったことや質問紙構成の問題などから、信頼性の低い結果しか出なかった項目がいくつかあり、課題も残されている。本研究が、今後就職を控えている名古屋大学の学生にとって少しでも示唆のあるものとなるならば幸いである。

参考文献

植村勝彦　1977　進路・職業選択　シリーズ現代心理学　第4巻　青年の心理　福村出版

浦上昌則　1996　就職活動を通じての自己成長―女子短大生の場合　教育心理学研究,44, 400-409

浦上昌則　1998　就職活動経験がその後の生活に与える影響について　悠峰職業科学研究紀要,6,5-13

エリクソン　E.H.　小此木啓吾（訳）　1973　自我同一性　誠信書房

喜田裕子・高木茂子　2002　大学生の進路（キャリア）をめぐる心理教育的支援に関する基礎的研究　人文社会学部紀要（富山国際大学）,2,39-48

厚生労働省　2011　平成23年版　労働経済の分析―世代ごとにみた働き方―

http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/11/, 2012.01.26

甲村和三　1989　進路選択における個性理解　職業生活の心理―進路選択とその指導―　学芸図書出版社

小杉礼子　1990　調査研究の課題と方法　日本労働研究機構　調査研究報告書　No.4　高卒者の進路選択と職業志向―初期職業経歴に関する追跡調査より―　日本労働研究機構

雇用職業総合研究所　1990　キャリア調査票A　日本労働研究機構　調査研究報告書　No.4　高卒者の進路選択と職業志向―初期職業経歴に関する追跡調査より―　日本労働研究機構

下村英雄　1994　大学生の就職活動における職業関連情報と職業未決定　進路指導研究,15,11-19

スーパー　D.E.　日本職業指導学会（訳）　1960　職業生活の心理学　誠信書房

仙崎武　1988　青年の進路形成と職業選択―その発達と指導　青年心理学ハンドブック　福村出版

寺田盛紀　2009　高校生の職業観形成に関する国際比較アンケート調査　日本学術振興会　科学研究費国際共同研究報告書

増田幸一　1969　志望職業選択要因とその変動の調査　進路指導,42(8),18-24

松本卓三　1993　進路選択に影響を及ぼす諸要因の検討　岡山理科大学紀要. B, 人文・社会科学 29, 133-145

松本卓三　1995　男子大学生の職業選択過程に影響を及ぼす諸要因の検討　進路指導研究：日本進路指導学会研究紀要 (16), 10-15

松本浩司　2008　高校生の職業観の構造と形成要因―職業モデルとの関連を中心に　キャリア教育研究第26巻,57-67

森下高治　1983　職業行動の心理学　ナカニシヤ出版

柳井修　2001　キャリア発達論―青年期のキャリア発達と進路指導の展開―　ナカニシヤ出版